

嫁にするなら岩手の女性

岩手県における婦人の意識調査結果から

岩手県企画調整部 公聴広報課

高橋 秀洋

はじめに

生活を、明るく大らかにとらえ、働くことが好きであり、生き甲斐でもあり、「男は苦勞の多いものだから」と夫を大事に扱かう — それが岩手の女性。

一方でがっちり自分名義の貯金通帳をもち、地域のサークル活動にもどしどし参加し、地方自治にも関心をもつ — それも岩手の女性。

昨秋、新情報センターをわずらわして実施した婦人意識調査の結果を、端的に要約すれば、こうなる。

県の各部局を代表する公聴広報主幹を集めた会議の席上、調査結果のまとめを発表したときも、県政記者クラブで報道発表したときも、列席した誰もが、思わずニヤリとしたり、「それに比べてウチの“婦人”は……」と嘆息したりしていたものである。

岩手県は、昭和51年度に、特定課題について三つの県民意識調査を行なった。「県土利用計画に関する意識」と、65歳以上の「老人の意識」に関するものと、そしてここで紹介する「婦人の意識」に関するものである。

〔調査目的〕

こんにち、行政を進める上で、婦人の果す役割りは大きい。選挙のゆくえを大きく左右するのも婦人票だし、町内会やPTAなど、地域自治についての“実権”も婦人の手中にある。

婦人の、地域自治にかかる意識と行動を把握することで、こんごの施策の推進に役だてようとしたものである。

〔調査方法〕

岩手県内に在住する20歳以上の女子を対象に層化副次無作為抽出して、個別面接した。

調査時期 昭和51年10月

標本数 600

回収数 544 (90.7%)

〔対象者の属性〕

年 令

年 代	20代	30	40	50	60	70以上	計
比 率	17.3	18.2	26.1	20.8	10.8	6.8	100%

職 業

職区分	自 営 7.2		家族従業者 30.1		被 傭 者 16.2		無 職	計
	農林漁業	商工サー ビス業	農林漁業	商工サー ビス業	事務職	労務職		
比 率	2.2	5.0	24.3	5.9	6.3	9.9	46.5	100%

世帯内地位

地 位	主 婦	世 帯 主	そ の 他	計
比 率	72.1	7.0	21.0	100%

結 婚

区 分	既 婚		未 婚	計
	有配偶	離死別		
比 率	80.0	13.1	7.0	100%

(なお、以下の記述の中で「全国」とあるのは、47・48年に実施された総理府の「婦人に関する諸問題調査会議」の総合調査結果をいい、岩手婦人の意識を端的にうき彫りさせるため、対比を試みたものである。)



結果の概要

I 家庭管理

衣食住から育児、家計のきりもり等、家庭にあつて婦人の果す役割りは、殊のほか大きい。だから、おかれている環境条件によって、生活意識にも大きな差が出てくるにちがいない。こう考えてまず、「現在の生活にどのくらい満足しているの

か」を問うてみると、満足層75%と出た。
 内訳 満足している 25.7 } (75.1%)
 ある程度満足している 49.4 }
 あまり満足していない 18.6 } (23.2%)
 満足していない 4.6 }

D・K 1.7%

この数値は、さきに昭和50年、NHKが18歳以上の婦人を対象に行った同様の調査の数値と近似してやや上まわり、岩手の女性は、現状肯定的・明るい生活を送っているものと読みとれる。そこで次に、婦人の生活に特徴的にかかわるいくつかのテーマできいてみた。

(1) 婦人の就業意欲は積極的

家事は女の任務、女の役割りとうけとめつつも、「職業専念型」が「家事専念型」を上まわり、働きものの岩手女性の姿がうき彫りになった。

問 あなたはふだん、家庭の家事について、どのようにお考えですか？ (カード提示：以下Cと略す)

		岩 手	東京※
A	楽しくてやりがいがある	10.1%	14.4%
B	家族のために喜んでやる	39.3	35.1
C	家族のために仕方がない	23.5	39.8
D	同じことの繰り返しでやりがいがない	6.4	6.1
E	D・K	20.6	4.2

※東京30キロ圏、NHK50年調査
18歳以上、N=1,033

家事肯定型(A+B)は東京と差がないものの、家事否定型(C+D)は、岩手29.9%に対し東京45.9%と、実に16%もの差が出ている。これは、岩手の婦人が、家事を女性の役割りとうけとめている証左といえよう。

問 一般に、女性が外に出て働くことについてあなたはどのようにお考えになりますか。(C)

		岩 手	全 国
A	女性は外で働かない方がよい	8.1%	7.8%

B	結婚するまで働くのがよい	11.2	18.6%
C	子供ができるまで働くのがよい	9.6	12.3
D	子供ができたらやめて、手がかからなくなったらまた働くのがよい	31.3	39.5
E	子どもができて働くのがよい	23.0	11.5
F	D・K	16.9	10.3

この回答結果をみて、D(保育職業両立型)がどちらも多いものの、注目されるのは、全国ではB(家庭専念型)が2位になるのに、岩手では、E(職業専念型)が2位を占めることだ。

(2) 働く婦人の生甲斐は「仕事」

職業専念型の多い岩手の女性は、実際、仕事についている状況(有業率)も全国レベルを上まわっている。この人たちの生甲斐といったら何なのか。無職の人を除いて、次の問いを行った。

問 あなたは、自分の生活の中で、家業や勤めなどの仕事と、家庭や趣味など仕事以外の生活と、どちらに生甲斐を感じますか。(C)

A	仕事のほうに生甲斐を感じている	23.0%
B	どちらかといえば、仕事のほうに生甲斐を感じている	19.9
C	どちらにも同じくらいに生甲斐を感じている	28.9
D	どちらかといえば、仕事以外の生活に生甲斐を感じている	5.8
E	仕事以外の生活のほうに生甲斐を感じている	6.9
F	D・K	15.5

有業婦人の約半数(A+B=42.9%)が仕事を生甲斐だと言いきる。脱仕事志向(D+E)は12%ちょっとあるだけだ。

とくに、職業別にみると、農林漁業の従事者に

仕事志向の人が多い。一見これは、矛盾していることのように思われる。さびしい自然との戦い、生産性の低い一次産業、働かなければ食べてゆけない風土の中で、なかば宿命のあきらめの中で、生産労働と家事労働のしがらみの中で、つとめ、耐えるだけのもの、それが仕事と考えられもするのだから。

県庁で農政にたずさわるある職員は、この数字を「驚きだ」といい、「発見だ」とも言った。

働いた結果が目に見える、働き甲斐のある職業についているということなのだろうか。

(3) 自分名義の貯金通帳を持って

シャモジとかサイフとかは、家計管理権を象徴するとみられている。そこで本調査では、自分名義の貯金通帳保有率から、家計管理の地位を類推してみることにした。

問 あなたはご自分名義の貯金通帳をもっていますか。

ある	68.2%	ない	31.8%
----	-------	----	-------

ちなみにこの保有率を労働省実態調査と比較してみると、都市団地52%、農村38%というから、本県の保有率は、高いといえそうである。

年代が若いほど、また、学歴が高いほど通帳保有率は顕著に高まってゆく。

70歳をこえた年代で49%と落ちこむのを見ると、大半の人はタンスにへそくるのだろうかと思ったり、自分の父母と同居の場合(85%)、夫の父母と同居の場合(63%)、同居なし(67%)といった数値の違いから、家計をめぐるドラマ性が感じさせられもする。

有職女性(71%)が無職者(64%)をしのぐのも、就業による経済の自立性を端的に示すものといえよう。

(4) 高い夫婦の相互理解度

夫婦間の親密度とリーダー権を探ってみよう。

問 お宅では、ご主人の小遣いをきめるのはあなたですか、ご主人ですか。

	岩手	全国
妻	10.8%	11%
主人	43.9	34
夫婦2人	23.2	21
その他	12.6	32
D・K	9.4	2

小遣いの決定権でみる限り、夫優位の回答が最も多く、しかも全国レベルを10%も上まわる。事務系、大学卒の女性が強いリーダーシップをもつほかは、おしなべて、夫の立場を推しはかる控え目な岩手婦人の人生態度がしのばれる。

問 ふだんあなたは、いろいろの問題についてご主人とよく話しあいをされますか。

	岩手	全国
よくする	49.0%	47%
まあまあする	36.6	36
あまりしない	12.6	15
ほとんどしない	1.8	2

問 あなたは子供抜きで、ご主人と2人で外出することがよくありますか。

岩手	東京文京区※ 中学父母
よくある	しばしば2人で 8%
あまりない	たまたま 5.8
わからない	全くしない 3.3

問 もし生れかわって結婚するとしたら、また今のご主人と同じ人をえらびますか。

	岩手	東京文京区中学母※
はい	39.5%	40%
いいえ	14.9	26
D・K	45.5	34

(※朝日新聞、S46)

夫婦の親密度を、話あい、外出、再婚の三つの質問でさぐってみたのであるが、結果は上に示したように、話しあい度については全国レベルと変りないものの、(比較基準に差はあるが)夫婦二人っきりの外出頻度が高い、とか、生れ変わったら今の主人と別の人は選ばない……といった数値によって、夫への愛情、夫婦生活の肯定の度合いの高いことをみせている。

(5) 男は苦勞の多いもの

さきに、生活の満足感をきいたが、では女性としての生きざま、幸福感といったものはどうなのかをきいてみた。

問 あなたは、女性に生まれてよかったと思いますか。

	岩手	東京※
よかった	57.0%	62.0%
よかったと思わない	24.1	17.8
D・K	18.9	16.1

(※NHK S50、前出)

問 一般的にいて、女性と男性とでは、どちらのほうが苦勞が多いと思いますか。

	岩手	岩手※
女性	20.0%	34%
男性	52.2	47
D・K	27.8	19

(※※文部省統数研、S48)

「農家の嫁」に代表される女性の苦勞は、限りが無い。毎日の農作業に加えて、家事、育児。さぞ女に生れた性を悔いているだろうと思う。たしかに、女に生れて「よかったとは思わない」人が24%もあり、DKまで含むと4割を越える。また、「よかった」と答えながらも、「もう一度生れ変わるとしたら」の問いには「男性」と答える人(21%)もあつたりして、ゆれる女ごころはとらえにくい。

だが、圧倒的多数は、女に生れて「よかった」といい、苦勞は「男性」の方が多いもの、と言ってくれる。身辺雑事にとどまらず、世の中の苦勞を一身に背負って働らく男性、そのことを誰よりも、女性がよく知っている。

男は苦勞が多いもの(52%)に対し、女こそ苦勞が多いのだとするもの(20%)の数値は、地域では県北の町村部、年齢では70歳以上のおばあちゃんなどの階層が、それぞれ27%をこすていどで、あとはどの階層をみてもさしたる違いはない。

(6) 夫よりも大切な子供

夫に対して抱いていた理解と信頼を、子供を問にはさんで見直しをしてみたら、子ども志向の数値が大きく出てきた。

問 ご自分とご主人とでは、どちらをより大切に思いますか。

	岩手	東京※
自分自身	5.7%	12.8%
どちらかといえば自分	9.2	21.3
どちらかといえば夫	28.5	37.0
夫	30.8	22.4
D・K	25.7	6.5

II 地域社会

問 ご自分とお子さんとは、どちらを大切に
 思いますか。

	岩手	東京※
自分自身	4.9%	8.9%
どちらかとい えれば自分	11.0	11.8
どちらかとい えれば子供	26.9	39.0
子ども	36.2	35.5
D・K	21.0	4.8

(※ NHK、前出)

以上の結果で見ると、岩手の女性の意識パター
 ンは一定している。自分を抑え、夫や子供を大切
 に扱おうとする比率が同じだからである。東京の
 女性が、子供は自分より大切にしながらも、夫と
 なる自分と同じウエイトになってくるのは、
 対照的である。

問 それでは、お子さんとご主人とではどうで
 すか。

	岩手	東京※
A 夫	13.1%	24.5%
B どちらかとい えれば夫	10.6	26.4
C どちらかとい えれば子供	19.3	22.5
D 子ども	17.8	10.8
E D・K	39.2	15.8

妻からの限らない信頼と愛情を得ているとうぬ
 ぼれていた岩手の男性は、夫志向(A+B)が東京
 の半分の数値にも満たないのを見て、かくぜん
 とするのである。さらに教育ママの多いであろう
 東京よりも、岩手の母の子ども志向(C+D)率

が高いことを、疑問に思うのである。

問 お宅では、お子さんのしつけや教育は、ほ
 ぼうまくいっているとお考えですか。

	赤の んこ 坊ろ	幼こ 児の ろ	小の 学こ 生	中の 学こ 生
ほぼうまくいっ ている	65.5%	62.6%	63.2%	63.9%
あまりうまくい かない	10.8	13.7	14.6	13.0
どちらともいえ ない	23.7	23.8	22.2	23.1

全国20万以 上の市 (総理府48年)	うまくいっている	15%
	まあうまくいっている	66
	うまくいっていない	13
	D・K	6

子供の教育が「うまくいった」と考える人は、
 岩手で65%前後だ。ところが全国の20万以上
 の市では80%を越える。この差は何だろう。

問 あまりうまくいかなかった原因は何だとお
 考えですか。(M.A)

・忙しくて十分子どもの面倒をみ られなかった	50.5%
・自分の知識や経験が足りな かった	29.5
・年寄りの甘やかしや無理解	16.2
・隣近所(友達)などの影響を受 けた	6.7
・夫の協力がなかった	2.9
・先生がしっかり教えなかつ た	1.9
・その他	9.5
・D・K	3.8

ここに至って、働きづめの岩手の女性は、子
 ものしつけや教育に十分な手を加えてやれなかつ
 たことを反省し、子に詫びる気持ちの側面が、前
 述の「夫よりも子ども志向」となって表れたもの
 と納得させられるのである。

地方自治の基本要素は、住民自治と団体自治の
 二つにあるとされながら、実際は、とかく、地方
 公共団体によるなかば他律的統治が想定されがち
 である。

こんにち、コミュニティ論議がさかんなもの、
 地域よりも、企業帰属意識の方が強い伝統風土の
 中で、地域——住民自治の原点が見失われている
 からに他ならない。

そこで本調査は、自治の根幹となる地域社会と
 個々の婦人とのかかわりあいをさぐってみた。

(1) 郡部で強いコミュニティの連帯

地域社会とのかかわりあいを端的に表わすもの
 は「近所とのつきあい」である。

問 あなたは近所の人達とどの程度のつきあい
 をしていますか。(C)(M.A)

A	・あいさつをしたり世間 話をする	90.1%
B	・日用品の貸し借りを気軽 にしている	42.5
	・2-3日留守にする場合、 戸締りや留守番を頼んで いる	34.4
C	・家族の病気など、困つ たときに助けあっている	50.0
	・一諸に買物に行ったり、 お互いの家へ行き来す る	39.5
D	・一諸に旅行、スポーツ、 レクリエーションをする	18.0
	・地域をよくすることにつ いて話しあいや学習を する	11.2

出された答をまとめると上の表のようになる。
 言うまでもなくAは最も弱い関係であり、Dが最
 も強い関係ということが出来る。

上の答でいちばん多いのは、AとCである。A
 が単なる儀礼的關係だとすると、Cは相互扶助を

基盤とする強い連帯の關係だといえよう。この血
 縁関係にも似た結びつきの輪があることに安らぎ
 を覚えるのは、ふるさとを離れた者のノスタルジ
 ィなのだろうか。

関係度		A	B	C	D
職 業 別	有 職	88%	53%	64%	29%
	無 職	92	57	57	13
市 郡 別	盛岡市	86	35	32	8
	その他の市	92	59	62	20
	町 村	89	57	69	29
学 歴 別	小	94	68	72	17
	中	89	59	67	24
	高	89	40	46	20
	大	83	40	40	38

内訳をまず職業の有無でみると、働く婦人の方
 が、C・Dつまり強い相隣関係をもっていること
 が注目される。農村型社会の中にあつて、勤労も
 家庭管理も、地域とのかかわり無しにはできない
 環境のもとにあるとはいえ、それだからこそ働く
 婦人の地域連帯感も強いのだといえそうである。

一方、都市化社会になるに従つて、こういった
 関係が稀薄になる。県都盛岡市と町村部とをくら
 べてみると、Cで1対2、Dで1対3.6と、圧倒的
 に町村部に住む婦人の相隣関係が強い。

また、学歴別にみると、一体に学歴の高度化に
 つれて相隣関係がクールになってゆく傾向がみら
 れるが、一方で、大学卒に最も強いDの關係度の
 増加をみるということは、地域社会の自治と振興
 にめざめ、行動する婦人の存在を示すものといえ
 そうだ。新しい意味でのコミュニティ形成といつ
 たことについて、この人たちに期待されること

も少くない。

(2) 地域ぐるみ集団から目的集団へ

岩手の婦人の大半(65%)は、婦人会や町内会などのグループに参加している。

	現在加入	加入希望
	%	%
町内会・自治会	28.9	0.7
若妻会・婦人会	27.6	1.8
農・漁協、商工会等の婦人部	11.9	1.1
老人クラブなどのサークル	9.4	1.5
趣味のグループ	6.8	16.0
スポーツ・レクリエーショングループ	4.8	6.1
教養学習のグループ	2.6	5.0
消費者、住民運動等の団体	2.1	2.7
奉仕、宗教団体その他	4.6	2.8

グループ加入率のビッグスリーは、すべて地縁集団である。「地域ぐるみ」という言葉のもつびきには、必ずしも、良い面ばかりとは言いきれないものをもっている。職場と家庭とのしがらみだけに生きている都市婦人よりは、地域とのかかわりあいのあることはプラスであるにしろ、「地域のみんな」のために埋没される個性・自我といったものが、無いとはいえない。

それを発揚させる場として求められるのが、趣味、スポーツ、レクリエーション、教養……といった目的別、機能別集団であり、加入意向も、そこに集中してくるのであろう。

(3) 身近かにある社会関心

働きものの岩手女性、家庭を大事にし、地域のつながりを大事にする彼女らの社会的関心領域を「新聞記事」と「社会問題」とから探ってみた。

新聞でよく読むのは、①地方記事、②家庭欄、③番組欄、④社会面、⑤広告欄の順である。全国調査(総理府)が①家庭欄、②社会面、③番組欄及び地方記事欄……とつづくのとは、かなり異なる様相を示す。

地方記事への関心は、即ち、コミュニティ連帯の強さのあらわれとも見られよう。

問 あなたは、日ごろ身近かな問題で特に関心をもっているものはどれですか。(C)(M,A)

物 価	%	公 害	%
物 価	46.7	公 害	6.1
育児・教育	22.8	防 災	4.6
仕 事	20.8	土 地	3.9
医 療	20.4	過疎・過密	3.9
所 得	15.6	余 暇	3.1
近隣のつきあい	13.6	自然保護	2.9
住 宅	11.4	観光開発	1.1
水道、ゴミ等施設	8.8	その他	0.2
道路交通	7.7	D・K	18.6

社会問題で最も関心の深いのは、物価、仕事、所得などの経済問題である。次いで育児、教育、医療など家庭的問題だが、注目されるのは、このつぎに「近隣のつきあい」が顔を出すことである。地域とのかかわりの深さ、関心の高さは、在宅時間の長い自家営業、家族従業型の就労タイプ等によるにせよ、注目されることである。

III 自治意識

岩手の女性に、地域連帯の輪の強いことは推察できた。だがそれが、直線的に住民自治と結びつくものでないことも、確かである。岩手にかぎらずどこでも、市民社会形成の経験をもたないままに「自治」を育ててきたからであろう。

そこで次に、住民の代表を議会に送る形を進める機会としての「選挙」についてきいてみた。

(1) 政治への不信感か

問 「適当な候補者がいない」とか「適当な政党がない」という理由で棄権する人がいますが、このような棄権は、さけるべきだと思いますか。やむをえないと思いますか。

	岩 手	全 国
さけるべきだ	39.2%	45.9%
やむをえない	35.8	39.7
D・K	25.6	14.4

「棄権はさけるべきだ」という声は、全国とくらべて低い。適当な候補者がいなければ、「棄権もやむをえない」(36%)といい、唯一の政治参加の権利への執着はうすい。

時あたかも、マスコミをにぎわしたロッキード事件や保守党分裂、新自由クラブ誕生など、政治への不信、混迷のさなかの調査であったことが、何らかの形でこの調査にもひびいていよう。

(2) 国政への関心は高い

女性には身辺意識、地元意識が強いといわれがちだが、実態はどうかをさぐってみた。

問 11月か12月に衆議院選挙が行われる予定ですが、あなたは今度の選挙では、どういう点を重くみて投票する人を決める予定ですか。(C)

地元の利益のためにつくす人	32.0%
業界や同じ職業層のためにつくす人	5.0
国全体の政治について考える人	39.2
どれとはいえない、わからない	23.9

問 あなたは候補者をえらぶとき、誰に投票するかを自分で決めていますか、それとも家族などと相談して決めていますか。

自分で決めている	68.8%
家族などと相談して決める	28.1
わからない、選挙権が無かった	3.1

地元利益のためにつくす人に投票する人は、年令的には60歳以上層、職業別には農林漁業層に多いが、総じてこの調査結果は、婦人の関心領域が狭いという通説を打破するものだった。「国ぜんたいにつくす人を選ぶ」という考えは、ロッキードもさることながら、他面、立候補予定者の日常活動等、地域で身をもって感じ、考えさせられるできごとによって由来するものも少なくないのではなかろうか。

候補者をきめるのに、「自分で…」という女性が20代や商工自営業者に多く、「家族と相談…」の比率が60代以上や農林漁業に多いというのはうなずけるが、どの数字をみても、「自分で…」のウエイトの高いのは、それだけ自分の判断力に自信をもっていることの証左といえよう。

(3) 行政への直接行動意向が3割以上

行政との協力関係にしる、対立関係にしる、こ

んにち、女性の行動力には、目をみはるものがある。

問 県や市町村の行政について不満があったら住民一人一人が意見を述べたほうがよいと思いますか、それとも自分のえらんだ議員や地元の有力者に任せただほうがよいと思いますか。

一人一人が意見を述べたほうがよい	32.4%
議員や地元の有力者に任せただほうがよい	41.7
その他	2.2
D・K	23.7

議員代表制を支持する者が半数を割った中で、なお5割以上の支持があるのは、地域別では県北町村部(52%)、職業別では農林漁業(50%)である。

逆に、直接的・個人的働きかけを支持するのは20代(52%)、未婚(50%)、勤め人(48%)といった階層にとくに目だつ。

(4) 政策選好度

最後に、県民福祉の行政分野を20項目に細分し、政策展望の量と強度をきいてみた。

	要望量	要望強度
お年寄りの暮らしを守る	35.5%	10.5%
交通事故をなくす	33.3	5.9
働く人の福祉を高める	31.3	12.3
学校教育を充実する	29.6	14.3
県民の健康をまもる	27.4	5.9
⋮	⋮	⋮
(以下・略)		

老人福祉、交通安全対策につづいて要望量(MAの単純加算)で3位、要望強度(最も力を入れてほしいとする施策だけの集計)で2位にランクされる「働く者の福祉」は、全国的にみたら、まさに異質のものといえよう。

地域的には県南の市部、職業別では労務職・農林漁業・事務などの職群、年齢は20代……といった人々に、この施策要望が強い。

夫をいたわり、子を気づかいつつ、けなげに働きつづける岩手女性、働らくことが社会通念とさえみられる倫理風土の中で、自己の存在を自覚しし生きようとする岩手女性があげる、これは精一杯の自己主張なのだろうか。

おわりに

きびしい自然と、生産性の低い産業構造の中であって、働くことを生甲斐だと言いきるほど、自らの生きざまを積極的にとらえる岩手女性の意識を追ってきた。それはさしづめ、明るくたくましくトラクターのハンドルを握って土にいどむ農村女性の姿とオーバーラップするものかもしれない。

設問に対する回答に多いDKの数値は、気もちのひっかかりになったままだ。従順が美德とされた過去の歴史の遺物なのか、温和内気な県民性なのか、自我と判断力の定まらないためなのか、単なるアンケート対応の憶くうさのためなのか…。

今回の調査結果は、直接、すぐ施策推進に反映を図られるもののほか、今後の婦人対策や調査研究にまたねばならぬものまでも示唆した稔り多いものであった。